

FORUM

Vol.14

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

第14号

CONTENTS

巻頭言	2
大阪府立大学理事(経営担当) 辻田 正人	
教育改革シンポジウム(報告)	3
「学生と共に考える府大の教育」	
FDワークショップ(報告)	8
ー大学初年次の基礎ゼミナール科目の設計ー	
高等教育開発センター	10
2010年度活動報告	
編集後記	12



大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

巻頭言

● 大阪府立大学理事
(経営担当)

辻田正人

MASATO TSUJITA

グローバル化する社会へ対応する力

底流で進む大きな変化の潮流が、ある出来事を契機としてその後の流れを一変させる事があります。日本が昭和から平成に変わった1989年に、ベルリンの壁の崩壊や、天安門事件がありました。また2008年9月のリーマンショックは、瞬く間に世界に波及し、その後の経済構造を大きく変化させました。

グローバル競争に直面している企業の現場に視点を移すと、久しくグローバル人材の育成が叫ばれていたものの、先進的な取り組みを実行したごく一部の企業を除き、1億人を超える人口に支えられた購買力があるが故に、グローバル人材育成を現場や人事部門に任せ、気持ちのどこかによそ事で済ましてきたきらいがあったのではないのでしょうか。しかし新しい成長戦略を実現するため、グローバル人材の確保・育成に経営者自らが腕まくりして、陣頭に立って指揮しました。

一部の企業が新卒採用の8割を外国人にする方向と報道されました。製造業では、アジア等の生産拠点を含めた総従業員数ではとっくの昔から海外人員が多くなっているのが実態で、これがビジネスパーソンの領域まで及んできたわけです。

英語力については、新規採用時の英語面接やTOEICレベルに加えて、管理職昇格時の必須要件化は当たり前で、一部企業では英語の社内公用語化を進める段階にまで進んでいます。

更に語学に加えて、もっと大事なものは異文化コミュニケーション能力です。

いわゆる冰山モデルが示すように、氷山の上(海面上)に見える言語や行動等を本当に理解しようとするれば、氷山の下(海面下)で目に見えない習慣、暗黙のルール、信念、価値観の相違を理解できなければならないと言われています。座学では身につけることは出来ないこの力を養うため、企業は一定のスキル・知識を教えた上で、有望な若手社員を海外に派遣し、異文化に身をおき、自ら課題解決を実践するPBL(Project Based Learning)に強力に取り組み始めています。

私も前職時代に、ローザンヌで次代を担う経営幹部を育成する「リーダーシッププログラム」を、日・米・欧・アジアの各拠点長合同で実施した事があります。その打ち上げの席で、欧州の拠点長から質問を受けました。「日本の本社で私が勤務したとき、私は何に一番困るか?」。私はとっさに「事業上の意思決定プロセスが分からないのではないか」と答えましたが、今でも的をついていたなと考えています。

アジアカップで日本を優勝に導いたザッケローニ監督がイタリアに帰国し「日本は教育、しつけ、清潔さ。全てが素晴らしく気持ちいい」と言ったと報道されていました。過去から日本は同質化された暮らしやすい国といわれます。しかし日本企業の日本本社の日本人同士の「あうんの呼吸」のマネジメントでは、優秀な海外人材も実力を発揮できないわけです。この大きな潮流を踏まえ、府大で学ぶ皆さんが、語学力と異文化コミュニケーション能力の獲得に挑戦され、社会で活躍されることを期待しています。

REPORT

教育改革シンポジウム 「学生と共に考える府大の教育」

報告

12月15日(水)、教育改革シンポジウム「学生と共に考える府大の教育」を実施しました。きっかけは、学生自治会から学長に大学への提言がいくつかあり、そのひとつ「授業の質やカリキュラムについて積極的に学生の意見を聞くことの出来る仕組みを作る」という要望があったことでした。学生の皆さんから府大の教育について生の声を聞くと共に、学生と教員がパネルディスカッション等を通じ、共に考える場となりました。

プログラム

<開会の挨拶> 石井 伸郎(高等教育開発センター副センター長)

<第 1 部> 「府大の教育について」

学生4名による意見発表 *一部学生については本人の希望により削除しております

根岸 信太郎(工学部) 澤根 弘典(生命環境科学部)

北林 美紗子(看護学部)

<第 2 部> パネルディスカッション

パネラー 高橋 哲也教授、意見発表者4名

司会 星野 聡孝教授

<閉会の挨拶> 奥野 武俊(学長)

第1部 学生の意見発表

*シンポジウムでは、4人の学生から本学で受けた教育について、意見発表をしてもらいました。それらの意見を、フォーラム編集委員会で文章にまとめ掲載いたします。



府大の「勉強環境」を考える 根岸 信太郎(工学部 電気情報システム工学科2年生)

府大の授業には改善の余地が十分にありますが。より良い授業を目指すなら、まず学生と教員がどういう授業や環境を望むのかを分かり合ったうえで、「勉強環境」の改善に一体となって取り組んでいくべきです。「勉強環境」というのは、授業を構成する要素、例えば、学生、教員、シラバス、教室や実験室などの設備、カリキュラム等のことを言います。もちろん、数々の改善は行われています。しかし実際には、例えば、ガヤガヤする学生を教員が注意しても、静かにならない授業も多くあります。また学生の側から見て、「面白くない授業」「シラバスと違う授業」があると思います。授業アンケートの結果に対しても、コメントを寄せる教員もいますが、回答がぜんぜん反映されない場合や、(授業担当の教員では解決できない)理由があって改善できないと回答される場合もあります。そのような回答を見ると、学生としてはアンケートに回答しても授業が改善されないと受け取ることが往々にしてあります。また「オフィスアワー」制度がありますが、この制度の存在自体が、教員と学

生と間の距離があるために、その距離を埋めようとして教員が努力して作られている制度ではないかと考えてしまうというのが現状です。

勉学環境において最も重要な要素は、学生と教員の「距離(心の距離)」です。すなわち、お互いの理解「相互理解」を得ることが重要です。相互理解することで、教員側は、学生はこういうことを考えているから、同じことを教えるにしても一工夫できる。学生側は、この先生がこういうことを考えて、自分たちに教えようとしてくれている。このようにして、望ましい学生と教員の関係が生まれ、意思疎通を経ながら段階を踏んで、授業改善ができるようになると思います。

そのような授業改善のための方法として、現在の授業アンケートのような単発的な意見交換ではなく、「継続して、直接意見交換が出来る場」を設けることが重要です。そこで生まれた「相互理解」が、「勉学環境」の改善に大きな効果が得られるのではないかと考えます。



府大の教育について 澤根 弘典(生命環境科学部 植物バイオサイエンス学科4回生)

今日のために、研究室やクラブの友人の意見を聞いてきましたので、それらをまとめてお話します。一つは授業についての良い点や悪い点の指摘と改善策です。二つ目は施設・設備についての要望です。

授業についてですが、教養科目の授業の良かった点は、専門科目以外のことを学べる機会であったこと、単なる雑学に終わらずそれを発展させた形でたくさんのことを学べ、いろいろな方向性を知ることができたことです。悪かった点は、人気の授業は受講者数が多く、大教室では声が聞こえにくく、質問がしにくいことです。さらに、希望者が多い授業は抽選となり、第2希望、第3希望の受講になることです。また履修するにあたり参考にする授業タイトルや授業概要から思っていた内容と、実際の授業が違っていたという意見は多数ありました。

教養科目の改善策として提案したいのは、一つは大教室での授業を週で複数回に分け、受講者を分散することです。もう一つは数回の受講後、予想していた内容と違った場合、受講科目を変更できるようにするという事です。

次に専門科目については、教科書を読み、ノートを執る授業も大切ですが、実体験は大変わかりやすいので、そのような体験をもう少し加えていただけたらいいと思います。

その他に不満に思う授業について友人たちが思っていることを紹介します。極端な例です。講義をほとんど行わず、授業の始まりにプリントを配り、自習をさせ、最後に出席確認を兼ねた確認テストを行う授業や、教科書を読んで質問したら「私も良くわからない」と答える先生(結局わかっている友人に教えてもらったこと)もありました。このようなとき、自分たちは、単位をとるために授業を受けているのではないと感じる時がありました。

施設・設備について意見があります。B4棟(生命環境科学部)は古い建物のため、雨漏りや頻繁にブレーカーがおちて作動中の実験機器に被害がよく生じます。また1階にあったパソコン室や図書室が無くなりました。そのため、空きコマ・休憩時間の有効活用が出来なくなりました。この点はB4棟利用者の切実な願いです。より良い教育を行うためには、金銭的な問題はありますが、施設・設備を整えることが重要ですので、よろしくお願いします。

府大の教育について 北林 美紗子(看護学部看護学科4回生(羽曳野キャンパス))

発表にあたり、看護学部4回生20名ほどの意見を聞いてきましたので、それらをまとめでお話します。総合大学である府大で、学業とそれ以外の学生生活を両立させ、充実させるために必要な意見を紹介します。

羽曳野キャンパスでの授業についての意見です。カリキュラムのバランスについては、1回生の専門支持科目を増やすなどし、学年間の多忙さの偏りを少なくしてほしいという声がありました。4回生後期は看護研究や国家試験の勉強に本腰を入れる時期のため、後期の選択授業は3回生後期への前倒しにする等して、4回生の自習時間を確保したいと思っています。受講体制については、学部全員(約120名)で受ける科目が多く、席の前と後で集中力に差があり、騒がしかったりするため、前期と後期で二つに分けるなど少人数制の授業を増やしてほしいです。また総合リハビリテーション学部の学生とは、社会に出てから同じ医療従事者として関係性があるため、もっと関わりのある授業が多くても良いのではないかという意見もありました。

中百舌鳥キャンパス・学生とのつながりについてです。総合大学に入学し、他学部との交流・中百舌鳥キャンパスとのつながりを求めて私自身は友好祭実行委員会に3年間所属していました。1回生は中百舌鳥で共通教育の授業を受けるため、そのまま集まりに参加し、交友関係を広げられました。医療系以外の学部の人との関わりは、将来看護師や保健師として多くの人と関わっていくときの引き出しを増やすことになり、視野が広がることでしょう。もちろんよい気分転換にもなりました。

中百舌鳥キャンパスで自分の専門とつながりが深い講義があれば受講を希望するとの声もありました。例えば、人間社会学部では福祉を学ぶことができるので、遠隔中継での聴講だけでも可能となれば、希望するという人もいました。反対に、看護学部や総合リハビリテーション学部の講義を受講することも、つながりが強化できるのではないかと感じています。もちろん、これらの意見に反対する意見もありました。医療系のみを真剣に学習する人からは移動が大変だという意見もありました。部活動をする人からは学割なしの交通費がかかる話や、学年暦が違うため休講措置がなく、欠席扱いとなる事態が発生するという話もありました。つながりのための送迎バスの本数とルートの増加も共にご検討いただきたいと思います。

教員と学生のつながりについてです。看護学部の教育には満足しています。通常の授業が熱心で、病院での実習も丁寧に指導していただきました。また熱心に指導していただいた先生方の人数が多く、サポート体制がとても充実していたと思います。実習中の先生方との距離も十分近く、満足している学生が多かったです。強いて望みを言うと、実習期間以外の授業は少人数にすることで距離の短いよい環境になるので、ぜひ少人数での授業の実現をお願いしたいです。



第2部 パネルディスカッション

3つのテーマ(授業・学生と教員とのコミュニケーション・大学生としての活動)を設け、まずテーマごとに高等教育開発センターにて行ってきたアンケート結果を紹介し、その内容と学生4人の発表を踏まえ、それぞれの視点で語り合いました。最後に、発表した4人の学生からは、「先生方の真剣な思いを聞くことができた」、「学生と教員の意識はどちらも高めていく必要があることを認識した」、「こういう機会は“人の意識を変える”ことを実感した」などの感想から、今後もこのような場を設け、学生が大学を知る機会をもっと設けてほしいと共通の意見をいただきました。

パネルディスカッションを終えて

副学生センター長 高橋 哲也

本日は、学生の皆さんからとても貴重な意見を多数いただき大変参考になりました。フロアの先生からは、学生の学習態度、教員の学生に対する接し方などについて大変厳しい意見もありましたが、学生・教員・職員が、どうやって府大を学生の成長につながる場としていくかについて、一緒に考えて、行動していく必要があると感じました。そのためにも、もっと身近に「話せる機会」を設けなければいけないと思いました。今日の学生さんは先生方が自信を持って推薦している、いわゆるハイパフォーマーです。学内には授業もしっかり出て、時間外に勉強もして、課外活動、ボランティアもして、インターネットもするというタイプの学生が1/4くらいいます。そういった学生にはもっともっといろいろなことを与えて、どんどん勉強・活動してもらいたいです。そうでない学生が3/4います。その学生の声も聞くためにも、今後もこういう機会を作りたいと感じています。もう一つは、発表者の話にあった就職活動でわかった「5つの力」。専門性の力は大学でつけますが、それ以外に「5つの力」等を身につける必要があることを示し、学生に自覚してもらい、カリキュラムや授業の中に計画して織り込んでいくことが大学側で必要なことだと思いました。このような活動をこれからも継続していきたいと思います。委員会や非公式な場でも始めればいいのかと思っています。本日はありがとうございました。



高橋 哲也 副学生センター長

閉会の挨拶

学長 奥野 武俊



奥野 武俊 学長

みなさんに感謝したいと思います。学生自治団体の代表者との話し合いの中で、一番共通して話し合えるのは「教育について」なので、話し合いの場を何らかの形で設けられないだろうかと話をしてきました。今日はそれが現実のものとなりうれしく思っております。

私が工学部にいた時には、このような機会がありましたし、最近でも行っているところがあることを聞いています。先生方には是非お願いしたいことは、大学全体でこういう機会を学生に提供していくことも大切ですが、学科単位や、あるいはもっと小さい単位で行うことで、お互いに意識を高め、共通の認識を持つように進めていただきたいと思います。お互いに協力し合って、教育と一緒に考えていく大学でありたいと思います。大学全体考えるこのような活動にはもっと大勢の教職員・学生の参加を希望します。どうか小さい単位から広げていくよう、みなさんをお願いしたいと思います。今日はありがとうございました。

シンポジウムについて、本号では学生の意見発表を中心に要約して掲載しております。

詳細は、センターWebページにて動画・参加者のアンケート結果を公開していますので、ご覧下さい。(学内限定)

http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/seminar/seminar_2010.html

シンポジウムに参加して

大木 理(生命環境科学研究科)

学生の生の声を聞くことはやはり重要だ——これがシンポジウムに参加して感じたいちばん大きな感想です。今回のシンポジウムでは学生も教員も参加者が少なかったのは残念でしたが、4人の学生の発表はどれも率直で、的を射た意見ばかりでした。本学の教員として、また大学として、反省すべきことがたくさんあることが改めて確認できました。今後も何らかの形で学生とともに教育について考える機会を持ち続け、学生からの意見を迅速な改善に生かすことが必要だと思います。

私は少し前に、大阪府立大学の学士課程教育における学修成果目標の策定に参加しました。それを単なる目標から現実のものとするためには、まずは本学のすべての教職員が共通の理解をもつことが必要であり、その上で力を合わせて教育システムのハード・ソフトの全体を、学修成果目標の実現に向けて近づけていく必要があると強く感じました。

学生が大学生という限られた期間に充実した時間を過ごし、人間としてできるだけ大きく成長してほしい——そのためには私たち教職員も一層の努力が必要です。そして、そのような恵まれた時間を過ごすことができる学生にも、しっかりした自覚と責任感をもってほしいと思います。

シンポに学生の成長を感じた!

水鳥 能伸(経済学部 経営学科)

残念ながらシンポには参加できなかった。しかし会議録を読むと、この日は熱のこもった議論の戦わされたことが伝わってきた。教育については万人が一家言持ち得るものだけに、それは予想されたことではあった。特に、外部からの騒音や雑音が大きくなっているだけに、府大がどのような人材を世に送り出すのか、そのためにはいかなる教育が必要となるのかについては、われわれ大学人にとって他人事ではあり得ない。

こうした大学にとって根本的ともいえる理念に関して、教員のみならず、学生そして職員が参加して、大学人にとっての“しゃべり場”を提供したのが、今回のシンポジウムの最も大きな成果だったと思っている。混沌、であったかもしれない。が、世の誕生と同じように、その混沌から堅固なるものが生ずるのである。

シンポ後、学生パネラーとして、自分なりに考え、発表し、議論する機会を与えてくれて本当に嬉しく、また楽しかったと“謝メール”をくれたゼミ生に人間としての成長を感じた。

シンポは確実に教育的効果を示したのである。



(高根)

平成22年度

FDワークショップ報告

「大学初年次の基礎ゼミナール科目の設計」をテーマに、今年で5回目となるFDワークショップを平成22年11月5日に開催いたしました。大学初年次における少人数ゼミナールは、学生の学びを、大学入学以前の「受験中心の学習」から「大学での学び」へとスムーズに転換させるため、多くの研究型大学で取り入れられています。本学でも平成24年度からの新カリキュラムにおいて、「初年次ゼミナール」として導入予定であり、昨年度に引き続きテーマとして取り上げることいたしました。

ワークショップでは、初年次少人数ゼミナールの目的等についてのミニレクチャーの後、東北大学での実践事例をDVDで観ていただきました。そして、各学部学科から集まっていた29名の先生方に、6つのグループに分かれて実際に科目設計を行っていただきました。最後に、各グループからの提案を発表してもらいましたが、明日からでもすぐに行えそうな提案が相次ぎました。ここでは、そのうちの二つを簡単に紹介します。

「Xを探せ」では、学生に与えるテーマを例えば「環境とX」のようにし、「X」の部分をもっと学生に考えさせた上でテーマを深く掘り下げていってもらう、というも

のでした。「環境」にあたる部分は教員の専門から選べばよく、教員なら誰でもすぐに担当できそうな実用度の高い提案でした。

「出身市町村改善計画」は、自分の考えを自分の言葉で正しく論理的に表現することを第一の目標とし、自分の出身地の問題点発見とその改善策を提案・実行する、というものでした。コミュニケーション力や観察力・企画力なども問われる、内容の濃いゼミになりそうな提案でした。

平成24年度から始まる「初年次ゼミナール」を控えているためか、今年度は例年以上に参加者の真剣度が高かった印象を受けました。最後の質疑応答でも、成績評価といった具体的な問題をめぐって議論が白熱したところからもそれが窺えました。

(星野)



FDワークショップに参加して

FDワークショップ2010の錯覚 …………… 荒木 長照 (経済学部)

11月5日のFDワークショップは、24年度から導入予定の初年次ゼミナールの授業内容を企画するという臨場感あふれるテーマであった。初年次ゼミの狙いは能動的な学習体験。高校までの与えられた学習からの転換のトリガーと位置づけられている。

仮想授業の企画とはいえ、現実の新入生の初々しくて真剣な顔が観えているのではないかと思えるほど、未経験の授業への具体的な不安と、あいまいな期待感のコンプレックスが参加者の表情には見て取れた。

4名程度のグループに分かれて、初年次ゼミの企画立案実習が始まる。私の配属になったグループは、歴戦のつわものぞろい。テキパキと企画の立案が進んでゆく。結局、ゼミの中身を具体的に提案するのではなく、さまざまなテーマに応用できるゼミのフォーマットを提案することとあいなった。

最後に企画案を持ち寄り、プレゼンとそれに対する白熱した議論へと突入。誰もが企画案に対する100%の自信がない分、正解を知りたいという知的エネルギーが議論に熱を吹き込んだ。かくして、このワークショップはまるで自分が初年次ゼミに参加している学生のような錯覚さえ与えてくれる、得難い体験となったのである。



ワークショップでの議論を振り返って …………… 浅野 雅子 (総合教育研究機構)

初めて参加したFDワークショップでしたが、部局も分野もさまざまな教員同士が一つのテーマで議論するという貴重な体験ができ、思いがけず有意義な時間を過ごすことができました。「大学初年次基礎ゼミナール科目の設計」を目標に、班ごとに分かれて議論を行いました。私たちの班では、設計の前段階の「大学での学びとは何か」という点についての議論に花が咲き、あっという間に持ち時間が終了してしまいました。発表では、高校までの「勉強」から、大学での学びへ移行するために必要な転換を、1.「他者評価」から「自己評価」へ 2.「競争存在」から「協調存在」へ 3.「短期的視点」から「長期的視点」への3つのキーワードでまとめた上で、基礎ゼミナール科目の設計の方針を示しました。質疑の際には、「自己評価」が議論となりました。1.での「評価」は、多角的な視点で判断(評価)するという広義の意味を意図したのですが、成績や点数をつけるなどの狭義の意味との誤解もあったように思います。大学も教員も、(狭義の意味の)評価を受ける時代の中で、広義の意味の評価についてもう一度問い直す必要があるのではと改めて感じました。

高等教育開発センター

2010年度活動報告

セミナー・研修会の企画・実施

例年実施している「新任教員FD研修」「FDセミナー」「FDワークショップ」に加え、今年度は学生の皆さんにも参加してもらい、「教育改革シンポジウム」を開催しました。また「FDセミナー」は、2012年度からのスタートを目指して進められている学士課程教育の改革を踏まえ、大学改革推進本部との共催で、「カリキュラム策定のための勉強会」として開催いたしました。

セミナー・研修会	内 容	年 月 日
教育改革シンポジウム	テーマ:学生と共に考える府大の教育 第1部:「府大の教育について」学生4名による意見発表 第2部:パネルディスカッション	2010/12/15
カリキュラム策定のための勉強会 (第1回FDセミナー)	テーマ:初年次少人数ゼミナール 「学士課程教育における初年次少人数ゼミナールの位置づけ」 (東北大学高等教育開発推進センター教授・羽田貴史)	2010/6/21
カリキュラム策定のための勉強会 (第2回FDセミナー)	テーマ:キャリア教育 「課教育で学生のキャリアをどう関連づけ、育てるか」 (京都大学 高等教育研究開発推進センター准教授・溝上 慎一)	2010/9/1
FDワークショップ	テーマ:初年次ゼミナール科目の設計	2010/11/5
参加報告会	11月15日に東北大学で行われた 「東北大学基礎ゼミ・FDワークショップ」の参加報告	2010/12/2
新任教員FD研修 (中百舌鳥キャンパス) (羽曳野キャンパス)	新規着任教員対象のFD研修会 レクチャー:「高等教育および府大を取り巻く現状とFDの必要性」 「府大で教育を行う際に知っておくべきいくつかのこと」 「授業の育て方」	2010/5/28 2010/9/9

調査の実施

◎授業アンケートの実施と分析

前期開講科目では、2010年5月31日～6月11日に学生ポータルを通じてWeb上で「中間アンケート(自由記述のみ)」を実施し、前期後半の授業改善に役立てていただきました。その後、7月20日～8月9日に「期末アンケート」を実施しました(教員が希望する科目は携帯電話で実施)。

後期開講科目でも同様に、「中間アンケート」を11月15日～12月3日に、「期末アンケート」を1月24日～2月10日に実施しました。アンケート結果については、各科目の担当教員のコメントを添えて、ホームページ上で公開(学内限定)しています。また、一部の大学院科目でも授業アンケートを実施しました。

◎大学院教育アンケートの実施

このアンケートは、大学院に在籍する学生から、授業や教育一般に対する意見や要望を集め、教育内容・方法の改善を行っていくための基礎資料を得ることを目的とし、2010年5月31日～2011年3月4日に実施しました。

印刷物発行

◎センターニュース発行

センターニュース「FORUM」を2号(第13・14号)発行し、学内の全教職員に配布した他、他大学FD関連部署や、大阪府内・その他の高等学校にも送付しました。

◎ニュースメールの配信

センターからのお知らせを「ニュースメール」にて全教職員に学内配信しました。

名 称	内 容	発 行 月
「フォーラム」第13号	「カリキュラム策定のための勉強会」(第1・2回FDセミナー)報告、IRIについて、キャリアサポート室から大学教育へ望むことなど	2011/2
「フォーラム」第14号	FDワークショップ報告、教育改革シンポジウム報告、高等教育開発センター活動報告など	2011/3
「ニュースメール」配信	授業アンケート他、センターの活動予定・報告、センターWebページの紹介・FD、SD関連研究集会等のお知らせなど	全14回配信

所員派遣

派遣先	派遣内容	派遣者	年月日
文部科学省 戦略的大学連携支援事業 第3回 合同FD研修(さかい新事業創造センター)	研修会出席	山口、高根 谷口	2010/4/5
関西地区FD連絡協議会幹事会(第4回)(京都大学)	会議出席	高橋	2010/4/9
関西地区FD連絡協議会第3回総会(京都大学)	総会出席 ポスター発表	山口、高橋 星野、上垣	2010/4/24
富士通フォーラム2010 「我が国の大学におけるIR機能の可能性と現状の課題」 (名古屋観光ホテル)	講演	高橋	2010/7/29
IDE大学協会北海道支部・北海道大学共催 IDE大学セミナー 「新時代の学習サポートを探る」(ホテル札幌ガーデンパレス)	講演	高橋	2010/8/19
IDE大学協会近畿支部 IDE大学セミナー 「大学教育とインターンシップ」(京都大学)	講演会出席	高根	2010/8/20
近畿地区大学教育研究会 第79回研究協議会 「教養教育としての初年次教育」(兵庫県立大学)	講演会出席	山口、高橋	2010/9/4
京都大学高等教育研究開発推進センター 公開シンポジウム 「FDネットワークの展開と大学教育改革の方向性を問う」	講演会出席	山口、高橋 星野、水鳥	2010/9/7
新任教員FD研修(大阪府立大学・羽曳野キャンパス)	講演	高橋、星野 高根	2010/9/9
日本数学会教育委員会 教育シンポジウム 「理系学生の数学教育再構築」(名古屋大学)	講演	高橋	2010/9/25
大阪市立大学 第17回教育改革シンポジウム 「学士課程教育の構築 ―この課題をどう受け止めるか」	講演会出席	高橋	2010/9/30
第1回Maharaオープンフォーラム(フレックス第5回シンポジウム) 「eポートフォリオが変える高等教育」(AOSSA)	講演会出席	小島	2010/10/2
公立大学協会セミナー 平成22年度教務系担当者協議会 「教育情報に基づく教学マネジメントに向けて」(梅田スカイビル)	講演	高橋	2010/10/22
大学教育学会 2010年度課題研究集会 「キャリア形成における大学教育―ライフサイクルの視点から」 (武庫川女子大学)	講演会出席	高橋、水鳥 上垣	2010/11/27-28
関西大学教育開発支援センター 寺崎 昌男 客員教授講演会 「『自校教育』とは何か―「自分はどんな大学にいるか」 この大切な問いに向かって―」	講演会出席	高橋、星野	2010/12/22
筑波大学教育GP成果報告シンポジウム 「筑波スタンダードに基づく教養教育の再構築」(UDX秋葉原)	講演会出席	谷口	2011/3/4
京都大学 第17回高等教育研究フォーラム	講演会出席	高橋、星野 水鳥、高根 谷口、塚本 上垣	2011/3/17-18

戦略的大学連携支援プログラム

平成21年度文部科学省大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出一国公立4大学IRネットワーク」の採択を受けて、同志社大学、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学の4大学が連携し、IRシステムの構築をはじめとして、様々な活動を行っています。

◎「一年生調査2010年」の実施及び調査報告書の作成

設置形態の異なる4校の連携を軸とし、各大学の学生に大学生活を自己評価していただくことにより、それぞれの大学における教育の成果を測定することを目的として毎年実施しています。

アンケートの実施期間:2010年11月2日～12月1日 調査報告書の発行:2011年3月31日

◎IR関連のシンポジウム等への学外派遣

派遣先	派遣内容	派遣者	年月日
IRワークショップ(同志社大学)	講演会出席	高橋、星野 上垣	2010/8/23
セミナー「アウトカム評価としての数学IRの機能強化策」 (明治薬科大学)	講演 講演会出席	高橋 上垣	2010/12/10
国内高等教育機関視察(国際基督教大学)	IR調査	上垣	2011/1/12
文科省・合同フォーラム推進事務局/ 大学教育改革プログラム合同フォーラム (秋葉原コンベンションホール他)	講演会出席	上垣	2011/1/24-25
IRシンポジウム(甲南大学)	講演会出席	高橋(司会) 山口、星野 水鳥、福田 上垣、大坪 廣島	2011/3/2

(星野)

編集後記

今回は、「学生と共に考える府大の教育」というテーマで開催したシンポジウムの報告をしております。4人の学生さんの発表内容も掲載しました。また、FDワークショップは、「初年次ゼミナール」をテーマにしたものです。当日は活発な意見交換が行われました。

巻頭言を辻田理事に執筆していただきました。外国語の能力と異文化コミュニケーション能力が、これからの時代にますます必要になることが説かれています。本学のこれからの教育の在り方に対して重要な示唆となるものでしょう。(高根)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース『FORUM』

平成23年3月31日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
総合教育研究機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中央区学園町1-1
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

〈編集委員〉 大木 理 上垣 友香理 兼田 博 木田 真生 小島 篤博 高根 雅啓(副主任) 高橋 哲也 谷口 栄一 田畑 稔
車 美愛 塚本 民雄 星野 聡孝(主任) 松室 光 水鳥 能伸 廣島 はるみ・藤澤 圭子(事務担当)

この冊子は1700冊作成し、1冊あたり76円です。